

2023.9.21



地域日本語支援ニュース こだま 第 435 号

ともに生きる
～地域で、日本で、そして世界で～



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★
【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

■日本で育つ：北海道より■

札幌イスラミックインターナショナルスクールは、札幌のイスラム教徒コミュニティが運営している 2021 年設立のインターナショナルスクールです。日本語指導を受け持つ山本さやかさんに学校や授業、生徒たちの様子を紹介していただきます。



札幌で学ぶイスラムの子どもたち
札幌イスラミックインターナショナルスクール
日本語講師 山本さやか

◆母国のことばと文化を知るために

学校は子どもたちが将来、母国に帰った時に困らないように、日本だけでなく母国のこと、そしてイスラム教についても知ることが大切だという親たちの願いのもと、設立されました。北海道大学から歩いて 5 分ほどの街中にあり、場所柄、ここに通う子どもたちの保護者は北海道大学の研究員も多いです。子どもたちの国籍は、エジプト、サウジアラビア、バングラデシュ、イン

ド等で、小学生から中学生まで 30 名ほどが在籍しています。算数や理科などの一般的な教科があり、これらは英語で教えられます。このほかにアラビア語、コーランを学ぶ授業もあります。基本的には家庭内では母語使用のため、日本語を使うのは学校内だけという子どもが多いです。日本生まれ、あるいは幼い時に来日した子どもたちは日本語が堪能で、これらの子どもたちは、日本の小学校から転校、あるいは日本の小学校に在籍しながらこのスクールに通っています。このような子どもたちは、一番流暢（りゅうちょう）に使える言語が日本語であることが多いのですが、イスラミックインターナショナルスクールに通ってアラビア語を学ぶことで、自宅では親とアラビア語でコミュニケーションが十分にとれるようになったという話も聞きます。

◆日本の文化 イスラムの文化

日本語クラスは 40 分 2 コマの授業が週 2 回です。このクラス内でしか日本語を使用しない子どもが多く、日本語がなかなか定着しないというのが実情ですが、「継続は力なり」で、それぞれのペースで少しずつ日本語の力をつけています。小学校低学年クラス、小学校中学年から中学生は初心者と既修者用クラスの 2 つがあり、合計 2 つのクラスで授業をしています。

ふだん子どもたちは、家庭内ではイスラムの文化、価値観の中で暮らしているため、日本の小学校に行った経験のある子ども以外は、日本の文化や価値観をほとんど知らないことも多いです。一つエピソードをご紹介します。低学年クラスで、教科書に出てきた「桃太郎」と「十二支の神様の話」を紹介したときのことです。小学 2 年生の女の子が「イスラムの昔話はアッラーの神様を信じなさいという教えだけど、日本の昔話はいろいろなことを教えるんだね。びっくりした！」と(英語で)教えてくれました。これは私にとっても思わぬ発見でした。毎回、いろいろな価値観の違いに私たち教員も気づかされることが多いです。日本語クラスは日本語を学ぶだけでなく、文化の出会いの場であると改めて感じます。

◆【子どもたちの作文例】

以下は小学校 5,6 年生と中学生の日本語初心者クラスで書いた作文の一部です。

わたしはナイジェリアじんです。がくせいです。えいごができます。どうぞよろしく。(S さん ナイジェリア 11 歳)

わたしはよくパンとたまごをたべます。オレンジジュースをのみます。*マフ

シとファラヘルとクシャリが大好きです。(A君 エジプト 10歳)

*エジプトの料理

サッカーが大好きです。へびがきれいです。さっぼろにすんでいます。かぞくは5にんです。ちちとははといもうとふたりです。(A君 ナイジェリア 13歳)

わたしは12さいです。わたしはバングラデシュじんです。サッカーが大好きです。えいごができます。バングラごができます。ウルドゥーごができます。にほんごべんきょうちゅうです。アラビアごべんきょうちゅうです。(S君 バングラデシュ 12歳)

◆世界を広げていけるように

この作文を書いたとき、子どもたちは日本語を学び始めて2か月ほどで、ひらがなとカタカナしか勉強していませんでした。今は『かんじだいすき1』（発行 AJALT）を使って漢字を学んでいます。子どもたちは毎回新しい漢字を学ぶことに興味津々（しんしん）です。

この学校の授業で私たち日本語教員ができることは多くはないと思いますが、日本語授業を通じて子どもたちが日本に出会い、世界を広げていけるような授業をしたいと思っています。